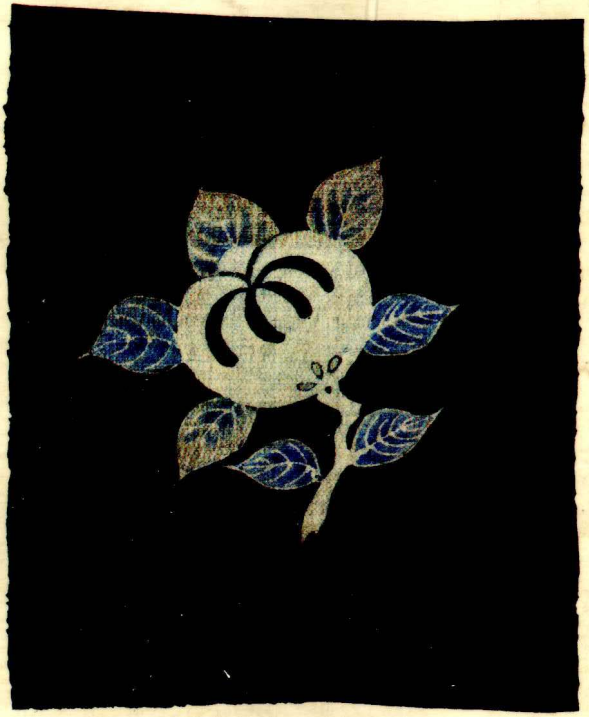
近代の文学と文学者

中村光夫



近代の文学と文学者

中村光夫

朝日新聞社

近代の文学と文学者

定価一五〇〇円

発行　昭和五十三年一月二十日

著者　中村光夫

装幀　多田進

発行者　角田秀雄

印刷所　共同印刷株式会社

発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

© Mitsuo Nakamura 1978

0095-254545-0042

目

次

序　芥川賞……九
文学とは何か……三
人間の内面と外界　三三
言葉　I　四三
言葉　II　五〇
リアリズム　六〇
明治をかえりみて……七一
自然科学と自然主義　七三
要求と方法の矛盾　八四
戯作の行方　九四
北村　透谷……一〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

独歩と透谷の自然　一〇七
「人生に相渉るとは何の謂ぞ」　一一八
「明治文学管見」Ⅰ　一二六
「明治文学管見」Ⅱ　一三七
開拓者の時代……一四九
知識階級と文学　一五一
演劇改良の運動　一六一
翻訳小説と政治小説　一七一
『浮城物語』をめぐって　一八一
文学極衰論　一八九
没理想論争　一九九
進化論と美的生活論……二〇九
樗牛の美的生活論　二一一

進化論の影響　三一
『蒲団』をめぐって……三九
「肉の人」の登場　三一
小説の運、不運　三九
『蒲団』の影響　四七
小説の風土　五五
私小説の典型三つ……六三
『お目出たき人』　六五
『別れたる妻に送る手紙』　七三
『異端者の悲しみ』　八一
三人の大正作家……八九
永井荷風　九一

生いたち——西洋——フランス——帰朝者の心理——思想の病人——女性観
有島 武郎　三三
荷風と武郎——「嫌ふべき特権」の重荷——劇的性格——孤独な戦い
芥川龍之介　三六〇
大正文学の終焉——「話のない小説」——私小説の根——過去の持つ可能性
あとがき　三八九
索引

近代の文学と文学者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序

芥川賞

一

現代の日本で代表的な文学賞は、と聞かれたら、多くの人は芥川賞と答えるでしょう。

これは無条件にあたっているとは言えない答えです。芥川賞はもっぱら「新人」を対象とした文学賞で、一般の文学者は――すでに一人前になったという理由で――受賞の資格を失うからです。

一般の文学者を対象とした文学賞もまた沢山あります。なかにはその年度の最高の作品にあたえると謳ったものもあって、そこで選ばれた作品にくらべると、芥川賞の当選作はかなり見劣りするのが普通です。不馴れな新人のことですから、これは当然ですが、しかしそれが呼ぶ社会的反響は芥川賞の方がずっと大きいのです。

一般の文学賞の対象になった作品に対する関心は、文壇の範囲にとどまるのに反して、芥川賞の方は顕著な一般性をもっています。ふだんは、雑誌の小説だとか、文芸時評だとかを読まない読者も、芥川賞を取った作品となると、それじゃあひとつ読んでみようか、といった気持ちになるようです。これは『文藝春秋』という雑誌の宣伝力にもよりますが、それだけではないようです。逆に、受賞作を載せた月の『文藝春秋』は、編集の苦労はいらない、自然に売れるなどと冗談に言ったりしますが、恐らく事実だと思います。

そういうふうに、一般の人が関心を持つのは、どういうわけかと考えてみますと、これは何と言っても新しいものは文学の世界では一つの魅力だからでしょう。新人が登場すると、そこに文学としても何か新しいものがあるのではないか、と漠然とした期待をみんなが持つ。この期待は満足させられ

ても、また裏切られても、それぞれ話題になるわけです。またいわゆる技法の新しさでも、これまで文学にとりあげられなかった社会の断面であってもよいわけです。

それからもうひとつ、これと関連して考えられるのは、この作品の受賞によって今までいわば素人だった人に、いきなり職業的作家としての進路が開けてくる。少なくともその可能性を与えられる。今まで学生なり、サラリーマンなり、教師なりであった人が、たちまち小説家になる。そこに一種のドラマチックな興味がある。他人がそうなるのが面白いだけでなく、自分もできればなってみたい、というような気持ちを、強弱の差はあっても、誰しも持っているようなところがある。これを現代のドラマというとおおげさになりますが、あるひとりの人間の生活をかけた劇がそこに演じられる。これが芥川賞の、他の文学賞にない魅力でしょう。

しかし、新しい作家に、文壇に出る進路が与えられたということと、その作品が文学に貢献しているかどうかとは、別の問題です。

賞というのは、だいいち多数決でもらうのですから、どうしてもいわば目鼻だちのいい、欠点が少ない、その代わりたいして強い個性もないような、よくまとまった作品が賞をもらいやすいのです。

ところが、そういう作品が文学として優れているかどうかは、これは少なくとも問題です。そういうつまり小器用に、こぎれいにまとまった作品だけが得をするというのでは、本当の個性の強い新人は、かえって圧迫されるのではないかと、こんなふうな議論をする人もおります。

これは確かに一理あることで、戦後の文学界を見ても、優れた作家だと思われる人で、若い時、文学賞をもらわなかった人、少なくとも芥川賞をもらわなかった人は幾人か数えられる。たとえば、

伊藤整がそうです。それから大岡昇平、三島由紀夫、こういった人たちは芥川賞をもらっておりません。そういう人たちが、新人として活躍した時に、芥川賞はなかったかというと、そうではない、あったことはあった。しかし、別の人にいってしまった。それが一つと、それから芥川賞は職業作家への道を、新人に対して開くというふうに言いますけれども、それでは芥川賞をもらってはっきり職業作家になれた人となれない人と、どちらが多いだろうかと考えてみますと、これは少なくとも半々だろう。職業作家という言葉をどういう範囲でとるかによって、それが半々になったり四分六になったりするでしょうが、とにかくみんながみんなるわけではない。職業作家にならなかった人を考えてみますと、そういう可能性がなまなか開けたような感じがするために、かえって自分の人生を壊されてしまったという人たちもいます。そういうことは、むろん賞の責任でもないし、まして選者の責任だなんて思ったら、選者は一日も務まりません。だからむろん本人の責任だろうと思いますが、賞をもらったことが、そういういわば悲劇の原因になっていることも否めない事実です。

二

そう考えると、賞の功罪は必ずしも一方的に決めるわけにいかない。しかし、むろんそれが芥川賞の存在を否定する理由にはならない。大きな社会的な影響を持つ仕事は、いろいろな意味で功罪半ばするのが普通である、ということが言えます。

芥川賞の場合、罪の方がもしあるとすると、それは社会的な影響が強すぎるところからきているようにも思われるのです。恐らく新人に対する文学賞が、こんなに社会的反響を呼び、受賞者の人生に

も影響する例は外国ではないでしょう。

また芥川賞の存在が日本の現代文学にかなり大きな影響力を及ぼしているのも事実です。多くの才能のある作家に進路を与えて、日本の文学を豊富にしている半面、文学運動を現代の文学界で非常に成り立ちにくいものにもしている。むろん、この文学運動が成り立ちにくいのは世界的現象であって、芥川賞のせいだけというわけではありませんが。

ご承知のように芥川賞ができたのは昭和一〇年です。僕がちょうど大学生のころで、主に菊池寛の提唱で芥川龍之介賞、それから直木三十五賞が並んでできました。選者は久米正雄、佐藤春夫、川端康成、山本有三、瀧井孝作などで、瀧井さんは今でも芥川賞の委員をなさっています。それから佐佐木茂索も加わっています。第一回の受賞作は石川達三の『蒼氓』、南米移民のことを書いたものです。直木三十五賞の方は、川口松太郎です。

ところでどういうわけで、こういう賞を作ったかというと、むろん雑誌社の仕事でありますから、雑誌の宣伝ということもあったでしょう。それから芥川と直木が相次いで亡くなったので、菊池寛がこの二人の名前を世間から忘れられないように、いわば友情の記念として作ったという私的な動機もあったと思いますが、それよりも、この賞の存在理由を社会にはっきり認証させたのは、だいたい昭和初年の日本の文壇事情があると思います。

文壇事情などを言い出したらキリがないし、私もそれほどよく調べているわけではありません。専門の本がいくつも出ていますから、そういうものに任せますけれども、ごく簡単に言いますと、昭和初期の文学は同人雑誌を中心にして出発しました。若い作家が同人雑誌に集まって、それぞれの主張

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.